

おやつのじかん3 -ちょっとひとやすみ-

—あの白い線—

NO. 74



あんずの事務所の入口に、白い線が引いてあります。少し剥げかけていて、そろそろ張り直さなきゃです。毎日、放デイの子ども達がいる3時半頃と5時頃に、この白い線をはさんだやりとりがいくつもあるんですよ。

「すみませ〜ん。野球のボールを貸してください」（はいどうぞ!）と、スマートに言えるようになった子。以前はモジモジしているだけで、スタッフが後ろから“影の声”で言うべきことばを耳打ちしていたのに、数年かけて自分で言えるようになりました。立派です!

「ぼくの本を貸してください」（それじゃあ、わからないなあ。これ? それともこれ?）と訊ねても、その子の目線はその本一直線だった子が、最近、相手にわかるように伝えられるようになってきました。何年も毎週繰り返してきた中で身に付いてきたことです。

「か・し・て」「ほ・ん」（上手になったね。はいどうぞ）と、実力行使より先に、言葉で伝えられるようになってきた子。以前は事務所の中まで入ってきて、半ば強引に探していたんですが、欲しい思いを、まずは人に向けてしっかり伝えられるようになってきました。

音もなく事務所に入ってきて、何やら物色している子。そこで、そばにいるスタッフが、「何が欲しいのかなあ? これかな? たぶん〜これ?」と実物を見せながら代弁するように声をかけます。すると目がキラリ。（これなんだ。じゃあ、ここから頼んでみようか?）と、白い線の引いてある事務所の入口まで連れていきます。「この本を貸してください」とスタッフが言うと、その子はペコリと頭を下げ、嬉しそうに持っていきました。これから積み重ねていきたいと思います。

ことばの力は、子どもひとり一人違います。自分の思いをまだ言葉で表せない子も、お喋り上手な子も、あんずのメンバーは多彩です。言葉が上手く話せなくても、身近にいる者が上手に間合いをとって、伝えたい思いを受け止めていけば、しっかりとやりとりはできるものです。言葉巧みに見える子でも、相手の意を汲まずにグイグイいってしまえば、やりとりは成り立ちません。白い線を使って、相手のことをよく見て話す機会を作っています。お互い意識しあってキャッチボールでできることが、何よりも大切なことです。

年齢が上がってくると、生活のエリアが少しずつ広がっていきます。また、そうあってほしいと思います。その際に、場所場所に合わせたルールに応じて過ごせるようになっていくと、自他共に気持ちよく、余計なパワーを使わずに楽しい時間を作ることができます。ところが、ルールの多くは目に見えません。手がかりのない中で、場の雰囲気から察せよと言われたら、困ってしまう子(人)も少なくありません。目印があると、子どもも一緒にいる大人も助かります。そして、何やらそれには意味があるようだとわかれば、無用に止められることも、きっと減ります。伝える側も説明しやすくなります。育ってきたやりとりの力を、日常に活かすことができます。



白い線が一本引いてあるだけの目印です。普段はあまり気にされず、踏みつけられている白線ですが、毎日誰かが、そこで大切なことを学んでいます。高価な教材、スペシャルな設定がもたらすものも大きいですが、たった一本の線で育めるものもあります。家でも、引いてあるマットの位置を変えるだけで線は作れますよ。さてと、そろそろ張り替えますね、あの白い線。(R4. 7) K